
Butterfly

桜桃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Butterfly

【Nコード】

N4326X

【作者名】

桜桃

【あらすじ】

新一の潜入調査モノ。

江羅利高等学校に通うギャル、

早乙女アゲハの父に麻薬密売の容疑が掛かった。

しかし、証拠は不十分。

アゲハの友達になり、証拠を見つるといふ仕事を新一は任された。

新一はアゲハに近づくが、アゲハは相当な厄介もので・・・。

Butterfly 1

「適役がおらんだよ・・・」

「はぁ・・・」

「で、この役を工藤君にやってほしいんだけど・・・
駄目かな？」

「・・・え？」

警視庁の出来事であった・・・

「え？潜入調査？」

「そう。」

「なんの？」

「江羅利高校に通ってる生徒の親が
麻薬密売の容疑がかかってるらしい。

なんとか証拠を掴みたいらしいんだ・・・
早乙女・・・って言ってたかな。」

「で、新一に・・・」

「その生徒に近づいて、家に潜り込み・・・
麻薬を見つける。」

「危険じゃないの？」

「危険・・・じゃない。」

「嘘ばかり。」

「あ・・・やっぱりわかるか。」

「当たり前でしょ？」

蘭は心配そうな顔で新一を見つめた。

「その生徒って女の子?」

「さあな。俺、聞いてねえもん。」

「浮気、しないでよね。」

「しねーよ。」

「浮気したら私だっしてやるんだから。」

「それはマジで勘弁。」

「約束だからね。」

「ああ。」

「じゃ、荷物詰めなきゃ！」

新一、しばらくマンション借りるんでしょ？」

「まあな。」

先生とかクラスメイトに押しかけられたら困るし。」

「うん。」

「しばらく、あえないね。」

「電話ならいくらでもきんだろ。」

「だけど・・・」

「心配すんなよ、一応一ヶ月の予定だからさ。」

「わかった。」

出席日数は大丈夫？」

「ああ。先生たちもわかってくれたから・・・」

向こうで出席した分、こっちにしてくれるってさ。」

「それっていいの？」

「いいんじゃないの？」

新一の適當さに蘭は頭を抱える。

「大丈夫かな、これで・・・」

「唯一心配なのは、料理だよな・・・」

「レトルトとかお惣菜は駄目よ？」

「はいはい・・・」

潜入調査というのはあまりにも急な話しで。

荷物を詰めるのに一生懸命になっていた。

「制服は？」

「ん？ああ、警部たちがそろえてくれるらしい。
マンションの家具も全部。」

「そっか。なら、安心だね。」

「ああ。」

「怪我だけ、しないように。」

「わぁーってるよ。」

「……」

急に黙り込む蘭を新一は不思議そうに覗き込んだ。

「どうした？」

「……ねえ、新一……」

今日、泊まっていきたい。って言ったら……だめ？」

「え？」

「やっぱり、一ヶ月も離れるの……さびしいもん。」

今日くらい、一緒にいさせてよ……一ヶ月分。」

「だめなわけねえよ。」

でも、おっちゃんがさ……」

「お父さん、今日は町内会の温泉に行っていないの……」

「そっか……」

んじや、今日は泊まってけよ。夕飯よろしくな。」

「うん……」

「あ、それと……今渡すのも変なんだけど……」

新一が鞆をこそこそとし始めた。

「なに、コレ。」

「合鍵。」

「「このの？」

「ああ。」

「もらっていいの？私が。」

「あつたりめえだろ？」

今日つくったんだ。その後潜入調査って聞かされて・・・」

「タイミングが悪かったね。」

「だろ？」

ま、一応渡しとく。

あつ、掃除しろ、とかじゃねえからな？」

「わかってるよ。」

蘭は嬉しそうに鍵を眺めた。

B u t t e r f l y 1 (後書き)

新連載始めました!!

これから、いろんなことがありますか・・・) あるんかい・・・)
どうぞ、宜しくお願い致します

Butterfly 2

「えー、今日から転校してきた藤峰君だ。」

辺りで「工藤新一に似てる・・・」

と口々に言い合ってた。

（そりや似てるよな・・・本人なんだから。

まあ、変装してたら、本人だなんて気づくやついいねえと思っけど。

）

「え？偽名？」

「ああ。どつすねばいい？」

前の晩、新一は蘭に相談していた。

「江戸川コナンくんがいいんじゃない？」

「お前、嫌味だろ。」

「だって……」

「コナンなんてからかわれるに決まってる。」

「別にいいんじゃない？」

お父さんがコナンドイルのファンだったんだ。で。」

「完璧嫌味だよな、それ。」

「別にー？」

蘭は面白そうに笑った。

「あ、いいの考えた！」

「え？」

「じゃ、藤峰、簡単に自己紹介。」

「はい。帝丹高校から来ました。」

ふじみねしん
藤峰新です。これからよろしくお願いします。」

「はい、拍手ー。」

ぱちぱち

(藤峰新……つたく、蘭の考えそうな名前だよな……。)

『だって、工藤君って……新一って……他の女の子に言われるの嫌なんだもん。』

(なーんて、いつになく素直に言うし……)

「じゃ、藤峰の席は……早乙女の隣だな。」

ピクリ

『早乙女』の言葉に新一は耳を傾けた。

(こりゃ、好都合・・・)

情報では、優しく、おとなしく、清楚で可憐。

大和撫子タイプらしい。

「あそこにいるのが早乙女だ。」

そこに座っていたのは・・・

赤毛・・・多分、染めたのだろう。

パーマ。

耳にはピアス。

制服はだらしない。

綺麗な顔立ちなのはわかる。

が、化粧をしていて凄くもったいない。

「よろしく。」

(なんか、情報と違うような・・・)

席に座る際、新一が軽く声をかけた。

「チッ」

誰かが舌打ちする。

主は隣に居る、『早乙女』と呼ばれた女だった。

「気安く話しかけてんじゃねーよ。」

ボソッ

と言っていたが、新一には完璧に聞こえていた。

(情報とまったく違つように思つのは俺だけか?)

〈数学の時間〉

「早乙女さん。俺、この教科書まだ無いんだ。
見せてもらっていいかな？」

これは、仲良くなるためにわざと忘れてきた。

もちろん、教科書がまだ無いなんてことはない。

少なくとも、同じ県内だからだ。

ドサッ

新一の机に教科書が乱暴に置かれる。

「え？」

「あたし、使わないから。」

「でも、授業……」

「うつせえな、あたしは授業する気がねえんだよ。
わかったら、話しかけてくんな。
んで、近寄んな。やさ男。」

（か、可愛くねー・・・）

新一は顔を引きつらせた。

Butterfly 2 (後書き)

こんばんわ〜 桜桃です。

アゲハちゃん、一筋縄ではいきません。

ただのギャルじゃないんです。

まだまだ挫けちゃいけませんよ、新一は・・・！ (笑)

Butterfly 3

「俺、相沢ってんだ！よろしくな。藤峰。」

「ああ、よろしく。」

「私、三神杏里。よろしくね、藤峰くん。」

何人か、新一の机に集まってきた。

隣の『早乙女』はいない。

「あのさ、一つ。聞きてえんだけど。」

「なーに？」

「隣のやつ。」

「まさか、藤峰くん……」

「アゲハを好きになっちゃった？」

「だよね・・・見た目は可愛いもん。早乙女アゲハ。」

「名前もカタカナつてところが、カッコいいよね。」

「いや、別に好きとかじゃねえんだけど・・・

ただ無愛想な奴だな、って思ってたよ。」

「だよな」。

俺、1年の時初めて早乙女見てさ、

一目ぼれしたもん。まさかああいう奴だと思わなかったけど。」

「誰かの話しじゃ、清楚で可憐で大和撫子タイプって聞いたんだけど。」

新一の言葉をバカにしたように笑った。

「えー、誰から聞いたの？」

全く正反对じゃん、早乙女アゲハ。」

「私らも結構街では顔の広いギャル一味なんだけどさ。

あの子もつとすごいもんね。」

「うんうん。昔暴走族の上の人と付き合ったこともあるらしいし。」

「ヤクザとも付き合ったらしいよ。」

「そんな情報まであるのかよ。」

「うわさでね、結構流れるのよ。」

「怖い人と付き合ってるから、アゲ八には誰も近づけないの。」

「それに、家も金持ちだしねー。」

この学校だってアゲ八の両親が資金出したらしいし。」

「この周辺のカフェや喫茶・・・デパート・・・」

ほとんどが早乙女家の資金だから、誰もアゲ八には文句言えないの。」

（なるほどな・・・）

「でも、アゲ八の家って何やってんのかしら。」

ほーんとなぞ。どっかの財閥・・・ってわけでもなさそうだし。」

「不動産屋とかじゃないの？」

「かもね。」

「毎月のお小遣いとか半端ないんだろうね。」

「香水も化粧品も全部高級品だもん。」

「そんなこと、わかんのかよ。」

「わかるわよ。」

「女ってこえー。」

新一はずっと考えこむ。

「アゲハの話しより、ずっと面白い話あるんだけどさー。」

「えーなにになに？」

「A組の中山紀伊子！彼氏できたらしいよ。
しかも社会人で医者！」

「マジー！？」

新一が考えている隣で、バカ騒ぎが始まった。

ガラッ

「起立、気をつけ、礼。」

「お願いします。」

「着席ー。」

「おっと・・・早乙女はいないのか？」

「多分サボりだと思いまーす。」

「そうか。」

教師は何事もなかったように授業を始める。

この学校で彼女に口出しできる人など、いないのであろう。

「この問題を、藤峰。」

「はい。」

すらすらと黒板に書いた。

「正解。」

「お前らも藤峰を見習えよ。」

「ふぁーい。」

「ほーい。」

「じゃ、教科書36ページを・・・」

「先生っ」

新一は声をあげた。

「体調が悪いんで、保健室行って来ていいですか？」

「ああ、わかった。」

(取り合えず・・・早乙女アゲハを探るか。)

〃
〃 屋上 〃
〃

「どじにもいねえとなると・・・じじしかねえよな。」

ガチャ

「運良く鍵が壊れてるし・・・」

「早乙女……いるか？」

「……んだよ、お前……」

「昨日転校してきた……」

「知ってただよ、そんなこと。」

「あたしが聞きたいのは、何でここにいるかってこと。
あたしの睡眠時間を邪魔しないでくれる？」

「……いいよな、ここ……
ちよつど風当たりがいいし。」

「つて、話し聞いてねえだろ……
ちやつかりこつちまで来てるし。」

「俺も向こうの学校で結構サボってた。」

「え？あんたも問題児なの？」

目を丸くさせて聞いてきた。

「・・・いや、授業のレベルが合わなくて。」

「嫌味かよ。」

「まあ、その度怒られてたけどな。」

「ふーん。」

「あんた、不思議だね。」

「何が？」

「あたしを見る目が他と違う。」

「目？」

「金持ちの娘とか、問題児とか、不良とかを見る目でも・・・顔や体目当てでもない・・・あんた、ただ者じゃないでしょ？」

ギクッ

（何で女はそう、勘がいいんだろうな・・・）

「ただ者だよ。」

「ま、そうだよね・・・やさ男にしか見えない。」

「あのさ、やさ男とかやめてくんない？」

俺、ちゃんと名前があんだけど・・・」

「・・・あたし、信用した人しか名前で呼ばないから。
あんたにはやさ男で十分。」

「あ、そ・・・」

(まだまだ手ごわいよな・・・)

「私、寝るから・・・とつとと出て行って。」

「へいへい・・・」

「それと、あたしがここに居るってちくんなよ。
鍵を直されかねないんだから。」

「言わねえよ。」

俺のお気に入りの場所がなくなる。」

「勝手に気に入ってんじゃねえよ。」

「はいはい。」

ガチャン

ドアを閉めた。

B u t t e r f l y 3 (後書き)

上手くいきかけたんですけどね・・・

そんな簡単に上手くいくわけがないです!!

) おいおい・・・

「ずっと思ってたんだけどよ。」

「？」

「藤峰ってミステリアスだよな。」

言い出したのは、
転校初日から新一にベッタリの植田智弘だった。

「自分のこと何にもはなさねえじゃねえか。」

「そうか？」

「勉強もスポーツも出来る・・・
でも、特技がなんだとか、苦手なのは・・・とかわかんねえじゃ
ん。」

「言っつてねえからな。」

「なあ、教えるよ。」

智弘はただを捏ねるように新一に言った。

「じゃあ、特技は？」

「リフティング、謎解き、射的、モーターボートと車の操縦。」

「へえ。車……」

「ハワイで父さんに教えてもらったんだよ。」

「ふーん。んじゃ、苦手なのは？」

「音楽、料理、母さん、おばさんに、園子、灰原に……」

「おいおい、人物になってるぞ。」

それに園子って？もしかして、彼女とか？」

智弘は瞳を輝かせた。

「ちげーよ、ただの友達。」

「そっか。じゃあ次は趣味。」

「読書。」

次々と出てくる質問に新一はめんどくさそうに答えた。

「嫌いなのは？」

「ラブストーリーとか。」

「嫌いそうだもんな。んじゃ尊敬する人・・・とか
あ、いねえよな!!！」

「両親とホームズ。」

「あ、いるんだ・・・」

「まあな。」

「じゃ、次は・・・好きなの。」

「蘭・・・」

「へー。」

新一は慌てて口をふたぐ。

「どうかしたか？」

でも、知らなかった。藤峰が花が好きなんてぞ。」

「あ・・・花・・・」

「ん？違うのか？」

「い、いや！そうなんだ。」

（蘭が花の名前で助かった・・・）

「じゃあ、最後。嫌いなものは？」

「レーズン。」

「レーズン・・・俺、好きなんだけど。」

「あ、そう。」

「なんだよ、興味ねえみたいに！！」

「興味ねえし。」

「ふっじ〜み〜ね〜！！」

「男子って、仲いいよね。」

ま、それがうちのクラスのいいところだけど？」

「だね。」

ガラッ

「アゲハ・・・」

突然アゲハが入ってくる。

「なにー？遅刻？アゲハつてばやるう！！」

「・・・んだよ。」

「え？」

「うっさいんだよ。あたしに話しかけないでくれる？」

「・・・なっ・・・！！」

「何？なんか文句でもあるの？」

「いいよ、何でも言えば？あたしは別にどつってことないから。ただ・・・暴力でもふるってみな。あんた、即退学だからね。」

「・・・っ」

こう言われちゃあ、何もいえない。

「調子にのんなよ！」

あんななんか、金と顔と体とつちゃえばあんたには
何も残らないんだからね!!」

「で？」

「で、って・・・」

「結局、あたしがうらやましいんでしょ？」

「なに・・・っ」

「あたしは、金と顔と体があれば十分だから。

友情とか愛情とかそんな温いごっこ遊びなんてまっぴらごめんだ
しね。」

そう言ってアゲハは再び、教室から出て行った。

「ムカつく!?!」

「気にすることないよ、奈々子。」

「そっだよ。あなたには皆がついてるんだからよ。」

「……………」

（あいつ、相当な嫌われものだな…………）

Butterfly 4 (後書き)

まだまだ続きます!!

アゲハちゃんの波乱な一日が・・・。

これからまた、平日は予約更新となります。

ご了承ください。

『TO 新一。』

おはよう！潜入調査、今日もがんばってね。
ちゃんと栄養取ってる？それだけが心配だわ……。
それじゃあね、藤峰新くん？

蘭。
』

「それだけってなあ……。』

蘭の文面に新一は笑みをこぼす。

「なーに見てんだよ、工藤」

「別になんでもねーよ。」

「なんでもねーわけねえだろ！見せるよ！……」

「無理。」

「即答かよ。」

見られたら、バレてしまう。

何もかもが。

「まあ、いいけどさー。」

それより、お前が早乙女を好きだって本当か？」

「はあ？」

「結構広まってるぜ？」

お前、早乙女のこと聞いているだろ？」

「まあ、隣だから。」

「隣だからってあんな風にきかねえよ。」

誰だって好きだからだって思うに決まってる。」

「そんなもんか？」

「そんなもんだ。」

「別にそんな感情ねえんだけどな・・・。」

しぶちくゆつに言った。

「お前がそういつつもりじゃなくても、周りはそう思ってたよ。」

智弘は呆れたように新一を見た。

ガチャ

「あんだ、猫？」

「はあ？」

「勝手にあたしの場所に居座ってさ。」

「この屋上の鍵が壊れてるのあたしくらいしか知ってなかったのに。」

「へえ。」

「居るのはかまわないけど、あたしの邪魔だけはしないでよね。半径1m近づかないで。」

「はいはい。」

アゲ八はお弁当を取り出した。

「結構家庭的な弁当なんだな。」

「うっさいわね。悪かったわね、お嬢様らしくなくて!」

「そんなこと言ってねえだろ。」

「あなたのお弁当はお母さんの手作り?」

「いや、そついうわけじゃ……」

「自分で?」

「それもちょっと、違う・・・」

「変なやつ。」

(まさか、お惣菜をそのまま入れた。なんて言えねえよな・・・
蘭にあれほどお惣菜はだめだって言われてた手前・・・。)

「お前ってさ、クラスのやつらにも今みたいに喋られねえのかよ。」

「・・・なによ。あたしがあんたに心を開いてる。」

「とでも言いたいわけ？」

「そうじゃねえよ。」

「でも、クラスのやつらに結構冷たいだろ？お前。」

「冷たくしてんのはあいつらだよ。」

「あたしはちゃんとしてるつもりだったんだけど。」

「ちゃんとして・・・。」

「話しはそれだけ？」

「あ、ああ・・・。」

「じゃ、あたし寝るから邪魔しないでね。」

「もう食べたのかよ。」

「やさ男が退屈な話をしないから。」

「はいはい。」

新一はなれたように返した。

「食べ終わったら出てってね。」

「目障りだから。」

「わあってるよ。」

新一は弁当箱を片付けると屋上から出て行った。

「やーっと居なくなった。」

「なんなんだよ、あいつ……。本当に猫みたいに居座りやがって。」

「ここはあたしの場所なんだかんって。」

B u t t e r f l y 5 (後書き)

次回もよろしくです^^!

Butterfly 6

そっつと中に入った。

中には誰もいない。ってわかっている。

「お邪魔します・・・」

大きな洋館。

何回も出入りしているのに、なんだかドキドキする。

それは、まぎれもなく・・・

もらった合鍵で入ったから。

目的もなく、ただ・・・入ったから。

「寂しくて、入ったなんて新一が知ったら・・・
嫌われちゃうかな。」

少し、心配する。

「新一……ちゃんと食べてるかな。」

「そもそも心配。」

「でも、一番心配なのは……」

「他の人を好きになったりしてないかな。」

「自分には何も無いから……」

「蘭は心配していた。」

「勝手に向こうに行って調査が失敗したら嫌だし・・・」

「え？工藤君？」

「はい。警視庁に寄ったりとかしてますか？」

「ええ。工藤君の姿で来たりしてるけど・・・」

「今日も来ます？」

「ええ。まあ・・・」

美和子は目を丸くする。

「じゃあ、これ。渡してもらっていいですか？」

「お弁当？にしては大きいわね。
お重箱みたい。」

「はい。お重箱ですもん。」

「え！？」

「あいつのことだから、私の言いつけ破ってレトルトとかで済ませてると思うんです。
だから、少しでも栄養をつけないと。
解決できる事件も解決できませんから。」

「あら、ラブラブね！やっぱり。」

「からかわないでくださいよー！！」

「わかったわ。預かっておく。
でも、会わなくていいの？」

「はい。会つと、もっと一緒に居たくなりますから。」

「可愛い」と言っ！」「

美和子は蘭の方をぽんぽんと軽くたたいて。

「まかせなさい！」と胸を張った。

(あれぐらいの量だったら、当分はもつよね・・・)

B u t t e r f l y 6 (後書き)

次回も宜しく願います!!

「あら、工藤君。」

「こんばんわ、佐藤刑事。」

「今日もご苦労様。」

「そうそう、工藤君に渡さなきゃいけないものあるのよ。」

「え？何ですか。」

「これよ。」

ドーンと迫力のある大きな風呂敷に包まれたもの。

「何ですか？これ。」

「お重箱に入ったお弁当ですって。」

「弁当！？」

「2時間ほど前に蘭ちゃんが置いていったのよ。
きつと、自分の言いつけ破って
お惣菜とかで済ませてるだろっから……って。」

(あたってやがる……)

「この量なら、当分はもつだろうって言ってたわよ。
食べ終わったら、ここに持ってきてちょうだい。
私から渡しておくから。」

「……ありがとうございます。」

「それにしても、ごめんなさいね。
潜入調査を頼んだばかりに、蘭ちゃんと会えなくなっちゃって。」

「いえ、大丈夫ですよ。」

(大丈夫じゃねえけど……)

「そう？ならよかったわ。
じゃ、おやすみ。」

美和子は軽く手を振って別れを告げた。

「・・・ほんと、世話好きだよな・・・。」

ピロピロ

着信：新一

「あれ、新一から？」

『弁当、サンキューな！上手かった！！
明日から弁当に移して学校でも食うから。
あれだったら本当に当分もちそうだな。』

とりあえず、助かった!』

「やっぱり、お惣菜で済ませてたんだ。

・・・しょーがない。また作ってやらなきゃね。」

ケータイを片手に蘭は微笑んだ。

Butterfly 7 (後書き)

この時間だと・・・

こんばんわ、皆様・・・。

完璧風邪をひきました。

桜桃です。

つらいですね。

鼻声ですもん。お昼になると直ってくんですけどね・・・。(苦笑)

どンドン冬に近づいております・・・

風邪には皆様、くれぐれもお気をつけください・・・。

それでは、次回も宜しく願います。

Butterfly 8

カチャ・・・

「お、やっぱり居た！」

「当たり前でしょ。」

新一はアゲハに近づく。

「だからー・・・」

「半径1m以内だよな。
わかってるって。大丈夫。」

「そう・・・」

パカッ

「・・・なんかさー、最近・・・」

「あなたのお弁当かなりとグレードアップしてない？」

「え？」

「だって、卵焼き・・・すごく家庭的な感じがする。前までお店って感じだったのに。」

（結構鋭いんだな・・・こいつ。）

「そうかー？」

「ま、私の知ったことじゃないけどね。」

「あ、そ・・・」

「じゃ、私も食べるか・・・」

アゲ八もお弁当箱を開いた。

「ねえ、ずっと聞きたかったんだけどさ……」

「ん？」

「なんでそんなに私のことをかまうわけ？」

「……」

「ほつといてくれればいいのに。」

「一人で居るから……って同情してほしくもないしね。」

新一は軽く考える。

まさか、「お父さんの証拠を見つけるため。」などいえない。

「な、なんとなく……」

苦し紛れの言葉だった。

「なんとなくなろう?」

「そ、そう! たまたま隣だったわけだし。」

「・・・」

怒るかと思い、身を守る覚悟でいた。

でも、次の瞬間聞こえてきた言葉は

「ふざけんな!」

とか

「何考えてんの?」

などの冷たい言葉ではなかった。

「クスクスッ」

笑い声。

「あはははっおっかしい。

何がなんとなく。よ！もうちょっとマシな考え思いつけねえのかよ！」

「わ、悪かったな・・・」

「ま、いいけどー。」

「じゃあ、俺からも質問。」

「え？」

「何で、あいつらに心を開かないんだ？」

「・・・」

「それ、答えなきゃなんない？」

「できれば。」

「・・・別に、嫌いってわけじゃないの。

でもさ、お金目当てだったり、顔とか体目当てだったり・・・
みんな、上辺だけの私に近づいてくんの。」

「・・・」

「それが嫌なの・・・。

早乙女アゲハっていう、1人の人間として接してほしいのに・・・
皆々、そういうやつなのかな、って思ったら・・・信用できなく
て。

友達がほしいのに、できない・・・。」

「早乙女……」

「わかった？」

「まあ、あんたは私をそう見てないみたいだからさ。」

「そっか。」

「それにしても、あんたは不思議ね。」

「え？」

「私を見て、好きになったりしないの？」

「何で？」

「何でって……これでも一応、美少女って言われていますから。」

「モデルと区別がつかないほどのプロポーション。」

「見た目は最高の女だって言われているの。」

「へえ。」

新一は興味なさそうに答える。

「へえってねえ……」

「俺、見た目なんてしらねえもん。」

「え?」

「よつは中身。だろ?」

「そうだけど・・・」

「見た目なんて、別にどうってことねえよ。

顔はいくつでも変えられるけど、中身はそう簡単に変えられない。俺はそう思ってるからさ。」

「じゃあ・・・顔がものすごいブスで、頭も運動も悪くて・・・料理も下手で、でもすごく優しかったら・・・それだけで好きになるの?」

「うーん・・・俺、好きなタイプに優しいやつって入ってねえし・・・」

「え? そうなの?」

「だったら、どういづのが中身良しなのよ!」

アゲハは意味がわからない!とイライラしたような口ぶりで言う。

「中身良しっていつか・・・」

俺の好きなタイプ、毛利蘭・・・だし。)

「さあな・・・俺、好きになったやつがタイプだし。

俺が好きになったやつが性格良し。なんじゃねえの?」

「ふうん。」

アゲハは頭に?マークを浮かべながらご飯を食べた。

B u t t e r f l y 8 (後書き)

アゲハちゃん、新一が好きなんですかね・・・？
私にもわかりません。

(おいおい、そんなんでいいのか・・・？)

新一が朝、教室へと向かおうとすると・・・
やけに、騒がしかった。

「喧嘩だー！喧嘩だぞー！」

「おい、誰が喧嘩してるって？」

「あ、藤峰！！早乙女だぜ、早乙女ー！」

「はあ！？」

「先輩と早乙女がやりあったみてーだぜ。」

（何やってんだよ、アイツ・・・）と新一は心の中でため息をつく。

ガッタン！

ガッシャーン

激しい音がする。

新一はひょいっと群がる廊下を除いた。

5対1。

言うまでもなく、アゲハが1人。

「あ、藤峰くん、おはよう。」

「はよ・・・それより、どうしたんだ？」

「アゲハが先輩にあそこで呼び出しくらってさあ。」

「アンタの顔、むかつくんだよ。って言ったんだよね。」

（なんだ、それ・・・）

「で、アゲハが・・・」

「そう？あたしはアンタみたいな顔にならなくてよかったけど。って言ったわけ。」

「へえ・・・」

「そしたら、尽かさず先輩がいる言うわけね・・・で、しまいにはアゲハがめんどくさくなってきたのかうっせえんだよブス！って言ったの。」

「したら先輩たち何もいえなくなっただ。で、この状況。」

（すげえ状況・・・）

「私、全部見ててさ。」

止めたほうが良いってわかってるんだけど、怖くて。」

「まあ、たいていの奴はそうだろうな・・・。」

く屋上く

「い……つてえっ！

本気で殴りやがってアイツら！！退学にしてやる！！」

「いや、本当にいたそうだな。」

「……見物？」

「まあ……そうなるかもな。」

「まったく、見てたんなら助けてくれたっていいんじゃないの？」

「お前の場合、貸しは嫌だろ？」

「・・・ま、そうだけど・・・。」

顔にまた一つ、アゲハは絆創膏をつけた。

「退学にする。絶対退学にする！！」

「まあ、落ち着けよ・・・皆お前がうらやましいんだからさ・・・
お前も相手にしなきゃいいのに・・・。」

「しゃーないでしょ？
あつたいがバンバン言ってくるんだもん。
だから、黙らせようと思って。」

「だからブスって言っていいわけじゃねえだろ？」

「そうだけど・・・
って、ほつといてよ！！あたしはあたしの好きなようにするんだ
から！」

「アンタが知ったことじゃないでしょ！？」

「そうだけど・・・なんとなく、ほつとけねえんだよな・・・。」

(なんか、蘭と灰原をくつつけたみたいな性格だし・・・)

「え・・・？」

「ま、そういうわけだから・・・

あ・・・それと、一応それ保健室行ったほうがいいと思っぜ？
ちゃんと消毒できるだろうしさ。んじゃあな。」

新一は屋上から出て行った。

「・・・なんなんだよ、アイツ・・・。やさ男のくせに・・・」

B u t t e r f l y 9 (後書き)

お、お、お？

アゲ八ちゃん、まさか・・・！？

なわけないか。

1人でのギャグ？はスルーしてください・・・。

それでは、次回も宜しくお願いします！！

「あんだ、早乙女アゲハ？」

「だったら何？」

「ちょっと顔貸してくんない？」

「なんで貸さなきゃいけないわけ？」

「話があるんだったら、ここで言えば？」

「それとも・・・皆に聞かれたらまずいこと？」

アゲハの言葉に黙る女子・・・3人組。

「・・・ま、しょうがない。

顔でもなんでも貸してやるーじゃないの。

で、どこで話す？」

「・・・付いてきて。」

*****裏庭*****

「単刀直入に言わせてもらおうよ。
アンタ、最近調子に乗ってるよね。」

「調子に乗ってる?」

「とぼけたって無駄よ。
私たち知ってるんだから。屋上で2人仲良くお弁当食べてるとこ
ろ!」

「はあ?」

「藤峰君と食べてるじゃない!」

この言葉にアゲハは目を点にした。

「え？それで・・・？」

「それだけよー!!」

「・・・はあ？それだけであたしを呼び出したわけ？
勘弁してよー。」

アゲハはハア。とため息をついた。

「アンタ、藤峰君のなんなの!？」

「んー・・・付き合ってる。って言われたい？」

「なっ・・・」

「アンタら、あの男が好きなわけー？」

アゲハの言葉に3人は顔を真っ赤にさせた。

「あの男が好きなら3人が集まってるんだ。」

「ち、違うわー!!」

「んじゃあ、あんたたちに言う義理ないよね？」

「うっ」

「……ま、安心しな。」

あたしとあいつはそんなんじゃないから。」

「う、うそよ!?!」

「……はあ？嘘じゃないわよ!?!」

「だったら、なんでお弁当と一緒に食べてるのよ。」

「……ハア。あんたたち、私とあの男が付き合ってるって決め付けたいわけ？」

私が違うって言うてんだから、違っの!?!

私が信用ならんなら、あいつに聞きなさいよ!?!」

「……」

「……いい？自慢じゃないけど、あいつにとって私は女と見られてないのよ!?!」

こんな美少女を目にして、不思議でたまらないわ。」

「……信用していいのね？」

「別に無理して信用しなくたっていいわよ。」

つーんとアゲハはそっぽを向く。

「つ、付き合ってたら、一生うらむからねー!!」

「覚えてなさいよー!!」

「信用したんだからねー!!」

大声で叫びながら3人は走っていった。

「……だーから、別に無理しなくていいんだって……」

アゲハがそつつぶやいたとき、ガサガサッと草が動いた。

「!?!」

「いやー、お前っていつつもそつだけど、正当なこと言ったよな。」

「・・・アンタ、そこに居たんだったら助けなくてもいいんじゃないの？」

モテモテのやさ男!!」

そう、草むらには新一が居た。

「俺が助けたら余計立場が悪くなるだろ？」

「・・・別に、立場が悪いのはいつもことよ。」

「だから、これ以上悪くしてどうするんだよ、ってことよ!」

「アンタには関係ないでしょ。」

「ったく、可愛くねえな・・・」

どっかの誰かみたいだ・・・と新一はつぶやく。

「・・・っ！余計なお世話・・・だよ!!」

近くにあったボールを新一に投げる。

しかし、新一はそれを余裕で交わした。

「・・・俺、これでも反射神経はいいほうだから。」

「あっそ・・・。」

B u t t e r f l y 1 0 (後書き)

こんばんわ！

桜桃です。

これを予約したのは・・・金曜日だから・・・

感想の返信は明日になりますね！！

遅れて申し訳ありません・・・。

しかし、ちゃんと返しますので！

（屋上）

「ねえ。」

「ん？」

「あんたと私って恋人同士に見える？」

「ブツ」

新一は飲んでいた珈琲を噴出した。

「きたねえな。ちゃんと拭けよ？」

「わあってるよ。」

「・・・そうだ。本当につきあっちゃまうか。」

「はあ？」

「そしたら、誰も文句言わないでしょ？」

「すげえ思考回路。」

「すごい名案だと思うけど。」

「俺、ここで彼女をつくる気ねえから。」

「はあ？いいじゃん、フリだよ、フリ！！」

「だから余計に性質が悪い。」

「なにそれー。」

アゲハは唇を尖らせた。

「ねえ。」

本日二度目の「ねえ。」

「ん？」

そして、本日二度目の「ん？」

「あんたの名前、何だっけ。」

「はあ！？それくらい覚えとけよ！」

「悪かったわね！やさ男って呼んでたら本当の名前忘れちゃったのよ！」

「文句ある？」

「ねえけど……」

「んで、名前は？」

「くど……じゃなくて藤峰新。」

「しん？あらたじゃなくて？」

「しん。」

「へえ……」

「んだよ、珍しくねえだろ？」

「そうだけど……んじゃ、よろしくね。藤峰。」

（……いいよな、呼び捨てじゃねえし……）

「よろしくな。早乙女。」

「私、アンタを友達だと思っただけなの？」

「どうぞ、ご自由に。」

「そっか。やっと心を開ける友達ができたか。」

太陽のように微笑むアゲハの顔を初めて見る。

「・・・お前、いつもそうしてるよ。」

そしてら、誤解も解けるぜ。きっと・・・」

「面白くないのに笑いたくないね。」

あんなふうにキヤピキヤピしたくない。」

「ハッハーン。」

「何よ!」

「お前、うらやましいんだろ。」

「はあ!??なんであたしが。あんなキヤピキヤピしたのに羨ましがらなきや

いけねえんだよ!バツカみたい。」

「ああ、そっか。」

でもよー・・・少し、心を開いてみたらどうだよ。」

「やだよ・・・」

「何で。」

「アンタ、あたしがされてきたこと知らないから

そんなこと言えんだ・・・あんな出来事さえなければ

こんなにひどくなることはなかった・・・

人を信用してなくても、問題児になるぐらいまでいかなかった・・・

」

「んだよ、あんな出来事って・・・」

「言いたくない。」

「あのなあ、言わなかったら俺だって理解のしようがねえだろ。」

「・・・嫌いにならない？」

涙を流すアゲハの姿をまたもや、初めての出来事。

いつもこんなに可愛くしてりゃあいいのに・・・

と新一はつぶやいた。

「ならねえよ。」

「・・・あたしが中2のとき・・・図書室に呼ばれたんだよね。」

|| || || || || || || ||

「アゲハ、可愛いから。」

行っただよ。その先輩、結構人気なんだよ?」

「でも・・・告白の返事に困る・・・。」

「そんなの、OKしちゃいなよ!本当に良い人なんだからさ。」

「・・・良子・・・。」

良子っていうのは、あたしの親友だった。

成績はトップで明るくて、人気者。

容姿しか取り柄のないあたしに初めて声をかけてくれた

親友だったの。

「図書室でしょ?」

「うん・・・」

「早く行っておいで。」

「わかった・・・。」

図書室

「せ、先輩・・・？」

薄暗い図書室をあたしはおそろおそろ・・・

声を出してみたの。

でも、次の瞬間腕が強くひっぱられていった。

「だれっ!?!？」

「うわ、本当に来た。」

「へえ、噂どおり、結構可愛いじゃん？」

「誰なのよ!」

「俺たち、お前が最近調子に乗ってるから痛めつけてほしいって依頼されたんだよねえ。ある子から。」

「誰よ、それ。」

「ん〜、それはいえねえよ。」

どんどん近づいてくる無数の手。

あたしはもう無我夢中で・・・近くにあったはさみを振り回したの。

何人かはかすり傷・・・。

それでもあたしは振り回し続けて・・・

逃げた。

「り、良子お。」

あたしは良子を見つけて、必死にしがみついたわ。

でも、良子はそんなあたしの腕を振り解いた。

「失敗したの？あいつら、根性なしね。」

「え・・・？」

「あいつらに依頼したの、私よ。」

「どうして・・・」

「どうして？アンタ、私の気持ちを考えたこと、ある！？」

私が好きになった男の子は皆アンタを好きになる。

私は勉強もたくさんしたし、内面をたくさん磨いた。

それでも好きになるのはみんな、可愛い子！あんた！！

そんなアンタの隣に居る私がどれだけ惨めだったか・・・」

「良子・・・」

「触らないで！！」

もう、限界なのよ・・・嫌なの。あんたのその顔が・・・

会ったときから、大ッ嫌いだった。」

「り・・・よう・・・」

泣き崩れるあたしを良子はあざ笑うかのように

見下してた。

「フツねえ、何で私があんたに話しかけたか、わかる？」

「え？」

「めちゃくちゃにしてやるっと思って思ったからよ。

あんたの顔見た瞬間・・・

私にないものを持っているアンタをめちゃくちゃにして・・・

私は優位に立ちたかったの。

そう・・・私はストレスを・・・私のコンプレックスを発散するために

話しかけたの。わかった？」

|| || || || || || || || || || ||

「これが、私の人を信用できなくなった理由。」

「・・・そっか。」

「何も言わねえんだ。」

「正直、今の俺には何もいえない。

ただ・・・あいつらがその良子って奴と同じとは限らねえんじやねえの?」

「・・・っわかってるわよ。」

「少し、ほんの少し、話しかけてみるよ。」

「・・・」

アゲハは黙った。

B u t t e r f l y 1 1 (後書き)

アゲハちゃんの以外な過去!?

〈教室〉

ガラッ

「お、おはよう・・・アゲハ。」

「おはよう。早乙女さん。」

「早乙女さん、おはよう。」

いきなり話しかけてきたクラスメイトに

アゲハは心底驚いた。

今まで、自分を無視することはあっても

話しかけてはこなかった。

仮に、話しかけてきたとしても

面白半分にしかすぎないのだ。

『少し、ほんの少し、話しかけてみるよ。』

新一の言葉が頭を過ぎった。

「お、おは・・・おはよ。」

アゲハが言葉を発すると、クラス一同は
瞳を輝かせた。

「おはよう!」

「よかった。」

早乙女さん、怖いイメージしかなかったから・・・
話しかけられてよかった!」

「ずっと友達になりたかったんだ。
でも、早乙女さん・・・きっと友達要らないだろうな・・・
って思ってたの。」

「でも、藤峰くんとは一緒にいるでしょ?
うらやましくて。」

「羨ましいなんて・・・」

「藤峰くんに言ったんだよ。」

どうしたら早乙女さんと仲良くなれるかな。って・・・
したら、思い切って話しかけてみる。って言われてさ・・・」

「そうそう!」

やっぱり話しかけてよかったなあ。」

アゲハは新一の姿を探した。

「あれ、藤峰は?」

「ああ、彼ならまだだけど?」

「ねえ、それよりさ、私たち皆・・・」

「早乙女さんと友達だって、思っでいいんだよね？」

「え？あ・・・うん。」

アゲハがそう言うと、

一同は嬉しそうにハイタッチした。

「やったあ！」

B u t t e r f l y 1 2 (後 書 き)

ずいぶん更新が遅れてしまいました・・・。
すみません。

「つたく、余計な事して!!」

「はあ?」

「あたしに友達できるよう、裏で手を回してたなんてね!」

「あんなあ、人聞きのわりいこと言うなよ!」

「だって、そうでしょ?」

「だけど・・・」

「ま、嬉しかったから許してあげるわ。」

「へ?」

意外な言葉に新一は目を丸くした。

「だーから、ありがとうって言うてるのよ!!」
「耳悪いのね!」

「・・・」

「なによ・・・どーせあたしらしくない。

とでも思ってるんでしょ? いーわよ、思いたきゃ思いなさいよね
!..!

「フンッ」

「ああ。思ってる。」

「即答!?!」

アゲハは「信じられない・・・」と呟いた。

「お前さん・・・そうやってって素直になれよ。

そっちのほづが可愛げがあるってもんだろ?」

「なに・・・それ。」

「ま、弁当くおーぜ。」

何事もなかったように弁当を食べる新一に

アゲハは呆れたようにため息をついた。

「・・・なあ、早乙女。」

「なに？」

「お前さ・・・ストレートにしねえのか？」

「何を。」

「髪。」

「嫌。あたし、この髪型気に入ってるの。」

「ふうん・・・」

でもよー、パーマよりストレートのほうが
似合ってるぜ、きつと。」

ドッキュンッ

少女マンガの効果音みたいなのが

アゲハの脳裏に鳴った。

カーーッと

アゲハの顔がみるみる赤くなっていく。

「おい、大丈夫か？熱あんじゃねーの？」

「べ、べつになんでもないわよ！」

「んなこと言っただって、顔が……」

「顔？あたしはもとからこんな顔よ！気にしないで！！！」

「……どうした？お前。」

「どうした？こーしたあ？」

「お、おま……大丈夫かよ、本当に？」

「大丈夫、大丈夫！絶好調よ！」

もう、校長先生絶好調！並よ！！！」

シーン・・・

「お前、キャラが・・・
本当に病院行った方がいいんじゃないの？」

（あたし、今なんて言った・・・？）

アゲ八には新一の言葉など聞こえてない。

（校長先生絶好調・・・）

あ、あたしはなにを言ってるの・・・！？

このあたしが・・・

あいつが動揺させるからよお！（）

「・・・ごめん、おかしくなった。」

「・・・戻ったか？」

「ええ。まあ。」

「お見苦しいところ、見せて悪かったわね。」

「ほ、本当に戻った・・・」

「なによ、信じられない？」

「いや、そうじゃねえよ。」

新一は心底ホツとしたように胸をなでおろした。

「ちよ、あんたそこまでホツとすること
ないでしょー!?!?」

屋上にアゲハの声が木霊した。

B u t t e r f l y 1 3 (後 書 き)

ではでは・・・次回

「はよー。」

「アゲハちゃん！おは・・・」

「ど、どーしたの？」

アゲハを観るなり一同は目を丸くした。

それもそのはず。

一気にストレートにしたのだから。

「ん・・・ちょっとイメチェン。」

「イメチェンって・・・変わりすぎー!!」

「ほーんとー!!」

大爆笑。

「へえ。ストレートにしたんだ。」

「べ、べつに！
アンタに言われたからじゃないわよ！！」

「はいはい。」

「す、ストレートもいいかな、って
思っただけなんだから！」

「わあってるって！
似合ってる。」

どきどき

「あ、あ、あ、あ、あ、あ……りがと。」

アゲハの挙動不審な態度に新一は目を丸くさせた。

「ま、とりあえず・・・お、お弁当だよ。
うん、食べよう!」

「・・・本当に大丈夫か？」

「だ、大丈夫!」

「お、おい、そんなに一気に食べたら
喉詰まらせるぞ。」

「ぐっみ、水・・・!」

新一はペットボトルをアゲハに手渡す。

「ありがとう・・・助かった。」

「ったく、言った傍から・・・」

「悪かったわね。」

「あ……そーだ、この間お前に貸した本があったろ。」

「うん。」

「あれさ、父さんのなんだけど、
今日中に渡さなきゃなんねえんだよ。」

「え？そうなの？私、持ってきてない。」

「だよなー……どうしよ……。」

これは作戦のうちだった。

「あ、なんなら、今日の帰り、あたしん家おいでよ。
すぐ持ってくるからよ。」

「マジ？」

これを狙っていた。

「助かる!」

「ごめん。あたしがずっと驚してもらってたからよね。」

「いや、俺も突然で悪かった。」

「じつして、ちやくちやくと進められていく。」

蘭と会わないまま、もうすぐ3週間が経とうとしていた。

B u t t e r f l y 1 4 (後 書 き)

次回もよろしくです!!

カチャッ

「ただいまー。」

「お嬢様、お帰りなさいませ。

・・・あら、そちらは？」

「どうだっていいでしょ。とりあえずお茶をお出しして。」

「あ・・・はい、かしこまりました。」

メイド服を着た女性は慌てて走る。

アゲハの家は新一と同じような洋館だった。

下には赤いじゅうたんが敷かれてある。

「でかい家だな。」

「そう？まあ、全てオヤジの金だけだね。」

新一は心の中で（麻薬で稼いだ金だな・・・）とつぶやいた。

「おめーの父さん、何やってんだ？」

「さあ、知らない。興味ないし。」

あつ上着はその辺においておいて。」

アゲハが指をさす方向に新一は上着を置く。

「じゃ、付いてきて。」

「ああ。」

アゲハに黙ってついていくと

白い扉の前まで案内された。

「ここ、あたしの部屋。」

「へえ。」

「入る？」

「いや、いい。」

「何だよ。」

「取って食われそうだ。」

「ちよっ人を何だと思ってんのよ!?!」

「冗談だよ、冗談。」

アゲハは「冗談に聞こえないのよ・・・」とぶつくさ言いながら
部屋に1人で入っていく。

カチャッ

「はい、これでいいのよね。」

「ああ。サンキュー。」

「まあ、また今度違うの貸してよ。」

「ああ、わりいな。」

「何でもいいからな。」

2人で話しながら会談を降りていくと

下で話し声が聞こえてきた。

「え？アゲ八に彼氏？」

「ええ、さつきもお部屋に2人で……
いいんですか？旦那様。」

「ああ。好きにしてやれ。
アゲ八くらいの年頃は好きにさせるのが一番だ。」

「そうは言っても……
あっお嬢様……お連れの方、もうお帰りですか？」

おどおどした口調にアゲ八はつい、舌打ちをする。

「はぁ……また告げ口。」

「またって何だよ。」

「前もあつたのよ。タバコ吸ってたら見つかってさ……
んで、オヤジにバラされた。
あのメイド、若いくせにオヤジを好きみたいでさ
でもあたしとは折り合いが悪くて……
んで、オヤジとあたしに仲たがいさせて自分がその間に割り込む・

・

「ま、そんなところね。」

「へえ……」

新一はアゲハの洞察力について関心してしまう。

「お前、警察関係の仕事とか向いてると思っぜ？」

「なに、それ……」

「おい、そこで何話してるんだ。」

「こっちに降りてきなさい。」

「はい。」

「……」

「そうだな。」

下まで降りるとアゲハの父はにこやかな笑みを

新一に向けてきた。

「初めまして。アゲハさんと同じクラスの藤峰新といいます。」

「ああ、よろしく。」

「あ、君……コックに頼んで特上のフルコースを頼むと言ってくれ。」

「わかりました。」

「ちょっと、パパ。」

「彼はもう帰るのよ？長居させたら困るわ。」

「おお、そうか。」

「いえ、大丈夫ですよ。」

「え？」

新一はアゲハに大丈夫だ。と口パクした。

「大丈夫なんだったら・・・」

「じゃあ、パパ。」

最高のおもてなしをしなきゃね。」

「ああ、そうだな。」

じゃあ私は着替えてくる。先に座っててくれ。」

「はい、パパ。」

アゲハの父の背中が見えなくなるまで見つめた。

「・・・おい。」

「なに？」

「口調がえらく違うみてーだけど・・・」

「ああ・・・しょうがないでしょ。」

ちゃんとしとかないと、いろいろ面倒だし。」

「へえ。」

「ちなみに、タバコ的时候は社会勉強だとか言って

泣いたらスルツと許してくれたの。」

「すんげー度胸。」

「親をだますなんてこれくらいどつってことないのよ。」

アゲハはしらっとして言った。

B u t t e r f l y 1 5 (後 書 き)

次回は楽しい

お夕食・・・？

カチャ

カチャ

静かに食器の音だけが聞こえる。

「アゲハ、食器で音を立てちゃいかん。」

「・・・すみません、パパ。」

「ところで・・・藤、峰くんだったかい？」

「はい。」

「アゲハとはお付き合いしてるのかね？」

ブーッ

アゲハは飲んでいたら飲み物を噴出してしまった。

「お、お嬢様……」

「ごめんなさい、フキンをお願い。」

「はい、どうぞ。」

「ありがとうございます。」

「アゲハ、どうした。」

「すみません。」

あまりにも唐突の言葉だったから……
「パパ、彼と私はただのお友達よ。」

「ただの友達を家に呼ぶのか？」

「呼んだんじゃないわ。」

「本を返しただけよ。ただそれだけ。」

「ほお……」

アゲハの父はワイングラスを片手にとる。

「じゃあ・・・お互いにその感情は？」

「ないわよ。」

「僕もないです。」

心底残念そうに顔を暗くする。

「君ならアゲハを任せられると思ったんだけどな・・・」

「勝手に決めないでよ。」

「私は好きな人くらい自分で決めますから。」

「そうか・・・」

「・・・ところで、失礼ですがお聞きしていいですか？」

「なんだい？」

「職業は何を？」

新一の言葉に一瞬、手が止まった。

しかし、笑顔をつくる。

「・・・経営だよ。」

「へえ・・・僕、将来は自分の会社を設立させようと思ってるんです。」

「ほお、それは壮大な夢だね。」

「はい。だから今のうちにいろいろと社会勉強を。差し支えがなかったら、お仕事の内容など・・・教えてもらいたいんですが。」

新一はとことん追い込んだ。

内心、とても焦っている。

3週間、蘭に会っていない。

そろそろ限界だった。

「そうだな・・・君くらいなら教えてもいいだろう。」

「え？」

意外な言葉に新一は目を丸くさせた。

「いろいろチェーン店を出しているんだ。」

「名前は？」

「Stone Hillっていう店だよ。」

「Stone Hillっていったら、今女子高生に話題のチェーン店じゃない。」

「あっちこっちにあって便利だって有名な・・・。」

「ああ、全て高校の近くにして若い子に気をひくってこう作戦なんだ。」

「・・・パパが経営してたんだ。知らなかった。」

「はははっ」

「・・・」

「ご馳走様でした。」

「また、いつでも来るといい。」

「じゃあ、またね。藤峰。」

「これ、アゲハ。呼び捨てにするな。」

「・・・藤峰くん、またね。」

「ああ、またな。それじゃ、失礼しました！」

新一は最後の最後まで笑顔を振りまいた。

B u t t e r f l y 1 6 (後 書 き)

さてさて・・・どうなるか!?

新一は現状報告のため警視庁に来ていた。

「え？確定？」

「はい。早乙女アゲハの父は麻薬密売人で
ほぼ確定です。」

あまりにも証拠がないため、

警察ももしかしたら違うのではないかと諦めかけていた。

「でも、その根拠はなんなの？工藤君。」

「Stone Hillです。」

「Stone Hill?」

「そのチェーン店、知ってますか?」

「あ、僕知ってます。中高生をターゲットにした店ですよね。」

「ああ・・・そんな店、あったのね。」

「まあ、佐藤さんは中高生とはほど遠・・・」

「なによ、高木くん。私が年増とでも言いたいの?」

「い、いえ・・・そうじゃなくて・・・」

「あれ?その店の名前・・・Stone Hillって聞いたことあるわね・・・。」

「聞いたことあって当然ですよ。」

新一は意味ありげに笑う。

「Stone Hillは石坂組が経営してる店なんですから。」

「え？」

「Stone Hillは石と坂を英語にしたもの……だから僕もすぐにピンとききました。」

「なるほどね。」

「でも、きっと彼は下の下ですね。」

「え？」

「麻薬を受け取って売買するだけの下っ端ですよ。いわゆる……関係者。になりますね。」

新一は淡々としゃべる。

「それより、ずっと聞きたかったんですけど……」

「何だね？」

「麻薬って1課の仕事じゃないですよね。なんで警部たちが調べてるんですか？」

「……麻薬だけじゃないのよ。」

静かに口を開く。

「え？」

「殺人の容疑も掛かっているの。

だからね、工藤君・・・その証拠も掴んでほしいんだけど。」

「お願い・・・できるかな？」

佐藤刑事と高木刑事は手を合わせた。

「・・・わかりました。」

(蘭と会う日が遠ざかっていくのは気のせいか・・・?)

新一は心の中で小さくつぶやいた。

B u t t e r f l y 17 (後書き)

捕まるのでしょうか？

アゲハ父・・・。

B u t t e r f l y 1 8 (前書き)

蘭視点です!!

そろそろ・・・食べ終わっただろうか。

約1週間前にお弁当を渡したきり。

一応長持ちするようなおかずにしたけど・・・

新一と会わなくなつて3週間。

いい加減、そろそろ会いたい。

前は少しだけ、ほんの少しだけ・・・平気だった。

あの時は傍にいただけで良い。

なんて思ってたのに

思いが通じたら

毎日会いたい。なんて思ってしまう。

欲張りだよな。

ピンポン

「はい。」

「蘭ちゃん？私だけど。」

「佐藤刑事？」

あ、ちょっと待っててください。今開けます。」

カチャ

「元気にしてた？」

「はい。なんとか・・・」

「その顔は工藤君に会えなくて寂しがつてたわね。」

「もう、からかわないてください。」

私の反応をあきらかに楽しんでいた。

「まあ、それはそうと・・・昨日工藤君がきたから貰ったの。

はい、どうぞ」

「あ・・・お弁当。」

「ちゃんと綺麗に食べたみたいね。

蘭ちゃんに貰ったときより随分軽くなってるわ。」

「・・・よかった。」

「工藤君が蘭ちゃんの手料理を残すはずないと思うけど。」

「佐藤刑事・・・」

私が軽く睨むと佐藤刑事は乾いた笑みを残す。

「じゃ、これを渡しに来たようなもんだから。
そろそろ行かないと・・・」

「あ・・・頑張ってくださいね。」

「ありがとう。その言葉、工藤君にも行ってあげて。」

「はい！」

・・・いいなあ。

帰っていく佐藤刑事の後姿を見て私は思う。

佐藤刑事は新一に会えるんだもんね。

・・・お仕事だから仕方ないけど。

いいな・・・

私も、会いたいのに・・・。

すごく遠い・・・。

待ってて。って・・・

また言われちゃった。

待っててくれ。って言葉に私すごく敏感になったかもしれない。

トラウマ・・・なのかな。

バカね、新一はもう何処にも行かないのに・・・

可愛い女の子に言い寄られてないかな。

他の子、好きになってない？

答えてくれもしないのに、私は心の中で質問を繰り返す。

私のこと、忘れちゃってるかな？

考えててもしょうがないよね。

・・・お弁当、作るっ。

B u t t e r f l y 1 8 (後 書 き)

新一が好きでしようがない蘭。

を書いてみました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4326x/>

Butterfly

2011年11月7日10時07分発行